



依佐美送信所記念館に保存されている長波送信装置の中核をなす高周波発電機は、平成19年8月、日本機械学会創立110周年記念事業の機械遺産認定に全国25件の一つとして選ばれました。依佐美送信所の長波送信装置はドイツ・テレフンケン社の設計・製作（回転機器はAEG社製）によるもので、現存する世界最大級の高周波発電機といわれています。本稿では、この高周波発電機が活躍した依佐美送信所の歴史と依佐美送信所記念館の主な展示品を紹介します。

依佐美送信所の鉄塔

高さ250mの鉄塔(写真1)は東洋一を誇り、依佐美のシンボルでした。国定教科書尋常小学地理書にその全景が紹介され、地元小・中学校の校歌にもうたわれました。東海道本線の安城(東刈谷)～刈谷間で列車の南側車窓から8基の鉄塔が建ち並ぶ姿が遠望され、大空にそびえ立つその雄姿は、多くの人々の脳裏に懐かしい影像として残っています。

図1のように鉄塔は4対8基、6段3方向の支線によって支えられ、吊架線には左右8条、計16条の逆L型の空中線が吊り下げられていました。

鉄塔は昭和2(1927)年9月に着工し、翌3年8月に完成しました。東京大学氷山弥次郎教授の指導、日本無線の楠仙之助技師の設計です。スチールの製作は石

川島造船所で、組み立ては大倉土木建設会社〔現在の大成建設株〕でした。碍子は京都・松風工業社の製造です。鉄塔の完成後、空中線の取り付け工事が日本無線電信(株)直営で行われました。

依佐美送信所は、第2次世界大戦中、日本海軍に使用され、日米開戦の指令暗号「ニイタカヤマノボレー二〇八」は、この送信所からも中継されたといわれています。戦後は米海軍に接收され、対潜水艦通信に使用されました。東西冷戦の終結により、平成6(1994)年8月1日に返還され、役目を終えた鉄塔は、同9年3月までに撤去されました。刈谷市は250m鉄塔の10分の1を記念鉄塔として2号塔跡に残しました。

対欧無線通信発祥の地

依佐美送信所は、わが国で初めてユーラシア大陸を越えて遙か1万kmの欧州へ電波を届かせるというロマンを実現しました。送信所跡地の一角(記念館の北)には記念碑(写真2)が建っています。碑面には「対欧無線通信発祥地」と刻まれ、電子情報通信学会東海支部50周年・依佐美送信所開局60周年を記念して、平成元年4月に東海支部代表の本多静雄氏が私財で建立したものです。

わが国の国際通信は、明治維新以後においても自国の通信手段がなく、頼るのは外国が敷設した海底ケー

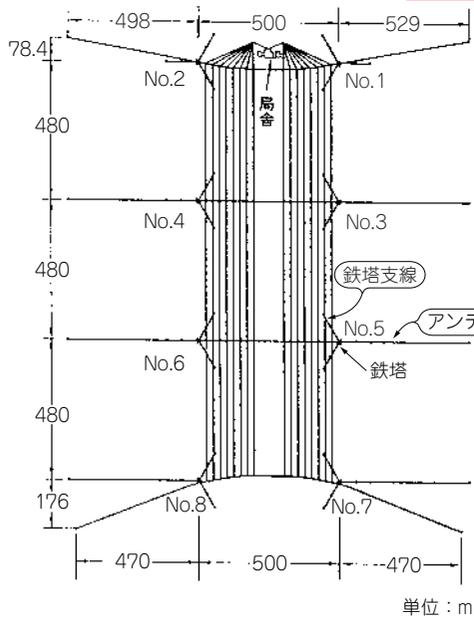


〈写真1〉⁽²⁾在りし日の鉄塔全景(南東からの眺望)

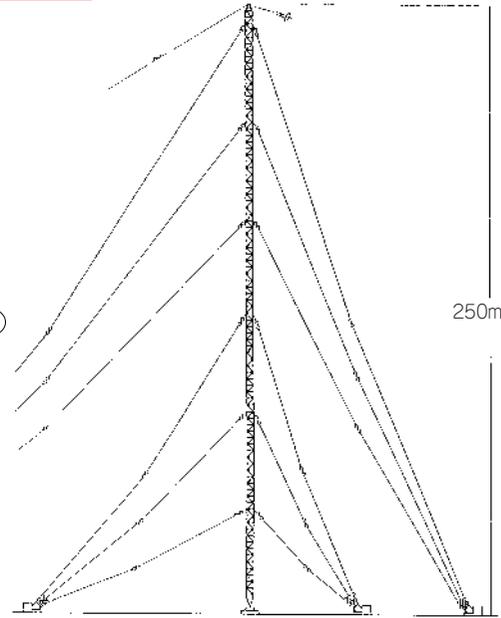


〈写真2〉記念碑「対欧無線通信発祥地」

見本



(a) アンテナ平面図



(b) 鉄塔姿図

〈図1〉⁽²⁾鉄塔とアンテナ

ブルでした。第1次世界大戦(1914～1918年)後、欧米諸国並びに南洋諸島との間の外交・通商関係の通信が激増し、自前の通信手段として、国際無線通信への期待が急に高まりました。

当時の対欧無線通信では、まだ短波通信に対する信頼が薄かったので、長波通信施設の建設計画が通信省によって進められました。送信所建設の適地として選ばれた愛知県碧海郡依佐美村内(現刈谷市)では、大正12～13(1923～24)年に本館・通信局舎・社宅用地が買収されました。しかし、大正12年9月の関東大震災の発生によって国家財政が逼迫し、国費による送信所建設が困難となりました。政府は直営を転じて民間資金の活用を図ることとし、国会の議決を経て大正14(1925)年10月、用地を出資して半官半民会社である日本無線電信(株)を足立させました。依佐美送信所は

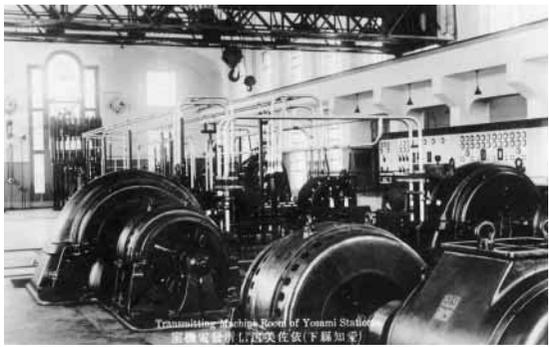
この新会社によって、2年余の歳月をかけて建設され、昭和4年(1929)4月18日開局式が行われました。写真3は本館、写真4は開局当時の局舎内です。回転機器は現用と予備の2セットが設置されました。右に操作盤、奥にトリブラやコイル、上には25t移動式クレーンが見えます。当初の機器塗装は黒色でした。

建築設計を担当したのは東京の三協土木建築事務所(代表 加護谷祐太郎氏)、本館と送信局舎の設計は、愛知県半田市出身の竹内芳太郎氏、建設は大林組でした。社宅は同事務所の中田武氏が設計しました。

建設資材の輸送のために最寄の駅から建設現場まで専用引き込み線が敷設されました。省線(現JR)刈谷駅経由三河鉄道(現名古屋鉄道三河線)小垣江駅着で、小垣江駅から現場までの約2.4kmを蒸気機関車が運搬しました。写真5はドイツから運ばれた機器を貨車



〈写真3〉送信所本館(当時の送信所後援会発行の絵葉書)



〈写真4〉開局当時の局舎内部(当時の送信所後援会発行の絵葉書)